

伝統芸能を題材にしたオンラインでの教育活動 —落語と紙切りを用いた実践事例—

畑佐一味 (パデュー大学)
米本和弘 (東京医科歯科大学)
濱田典子 (秋田大学)

1. はじめに

2020年に発生したコロナ禍は国際社会に大きな影響を与えており、海外、日本国内を問わず日本語学習者の学習環境も大きく変貌した。渡日を予定していた外国人学生の多くは自国待機を余儀なくされており、日本国内にすでに滞在している留学生も自由に動きにくい状況となった。多くの国で授業が全面的にオンライン化されただけでなく、発表会、専門家によるレクチャー、文化体験、祭り、会話の時間など、様々な知的、文化的刺激を与える活動もできなくなり、学習環境は味気ないものになってしまった。学習する場が海外であれ、日本であれ、このような活動は学習動機を維持する上で欠かせない。そこで、私たちはオンライン環境を利用した教育活動について模索し始めた。

2006年から2018年まで、畑佐は落語家である柳家さん喬師と柳亭左龍師、紙切り師の林家二楽師を米国ミドルベリー大学日本語学校⁽¹⁾に招待し、日本語教育の中で伝統芸能が味わえる環境を作ってきた。この間、単に落語を鑑賞するだけでなく、初級学習者も含めて小唄を演じる活動や落語や紙切りを積極的に理解するための授業実践が多くなされ、学生からの評価も高かった(畑佐・久保田, 2009; Hatasa, 2009; 米本・曾我部, 2012)⁽²⁾。

そこで、これまでの経験に基づいて、落語と紙切りを用いた実践を共有することにより、コロナ禍で現在多くの人が感じている閉塞感を緩和し、現在の日本語学習環境を少しでもよくするための取り組みの一案を提示できる可能性があるのではないかと考えた。また、この時期、寄席芸人の方達も舞台での公演が全くできなくなり、仕事がない状態に陥っていたので、協力をお願いしやすかったことも落語と紙切りをコ

ンテンツに選ぶことの一因となった。その結果、国内外の主に、高等教育機関に所属している日本語学習者と日本語教育関係者を対象にして、落語と紙切りを題材にした一連のオンラインでの教育活動を行うことにした。

本稿では、2020年4月から7月にかけて実施した落語と紙切りの実践事例を報告し、オンラインで行う文化的側面に焦点を当てた教育活動に関して私たちが直面した課題とそれに対する改善策を共有する。

2. 活動全体の流れ

本実践事例は全部で七つある。第一段階として、オンライン落語と紙切りの可能性を模索するための試行を四回行った。対象は日本国内外の高等教育機関や政府機関などに勤める日本語教育関係者が中心であった。各回のアンケートからZoomを用いた鑑賞が観客にどのように受け止められるのかを見極め、課題を洗い出していた。その結果、四回の試行が非常に好意的に受け止められていることがわかったので、第二段階として日本国内外の成人日本語学習者を対象にした落語と紙切りの観賞会、日本研究者向けの落語に関する講座と実演、日本語学習者向けの紙切りワークショップを実施した。これらの実践を通して、文化を題材としたオンラインの教育活動をした場合に何が課題となるのかを検討していった。

3. 可能性の模索：オンライン落語と紙切りの試行

落語と紙切りを用いた活動がオンラインで実現可能なかどうかを検討するために、四回の試行を表1の通り行った。一回目と二回目は柳亭左龍師による落語二席をZoomで鑑賞する催し

を行い、三回目と四回目は、柳亭左龍師と柳亭左ん坊氏による落語と林家二楽師と林家八楽氏による紙切りの鑑賞会を行なった。

表1 試行の日程と内容

	日時 (日本時間)	内容
第一回	4月18日 21時～	落語
第二回	4月19日 9時～	落語
第三回	5月2日 10時～	落語、紙切り
第四回	5月23日 20時～	落語、紙切り

3-1 第一回・第二回の公演

前半二回の公演は時差を考慮し日時を設定した。構成は同じで、落語二席と演者への質問コーナーであった。Zoomのホストは米国、演者と技術サポートは日本で行った。参加者は主に筆者の個人的な繋がりを使って募集した。その結果、日本国内外に在住する大学教員や国際交流基金の日本語教育専門家・職員など、合計130名ほどが参加した。日本語非母語話者も数名含まれていた。参加者の在住国・地域は日本、米国、イタリア、フランス、台湾、カナダ、ベトナム、英国、スロベニア、オランダ、シンガポール、ブラジル、フィリピン、オーストラリアであった。

演目は一回目が「つる」と「妾馬」、二回目が「転失気」と「妾馬」であった。「つる」と「転失気」は英語字幕表示用のパワーポイントを利用して、図1のようにライブでZoomの画面に表示した。「妾馬」は字幕なしでライブ配信した。左龍師は自宅からiPadを使って発信し、落語の高座のバーチャル背景を使った。公演後は日本語および筆者の通訳による英語での質疑応答と出演者との交流の時間を設けた。

参加者には落語を見る際のZoomの使い方を説明した資料を事前に配布した。試行段階であったことから、参加費は徴収せず、左龍師も出演料なしで協力してくれた。公演の運営はスムーズで、大きな問題もなく、オンラインでも十分に落語が味わえることがわかった。さらに、ア

ンケートの結果から、地理的、或いは予算的に日本から演者を招くことができなかった地域でも活動が可能になることや、質疑応答によって対面式の落語会よりも演者を近くに感じられることもわかった。



図1 落語と英語字幕の表示

この二回の試行では、オンラインという環境に適した内容と方法の再検討が課題として浮かび上がってきた。具体的には、落語の演目及びそれに関する情報提供、そして、オンラインという環境を生かした演者と参加者とのコミュニケーションの方法である。また、誰がいつ話すのかや演者側でのカメラやマイクの操作やタイミングに関して、事前にさらなる打ち合わせが必要であることがわかった。また、演者（発信者）が使う機器としてiPadなどのタブレット型コンピュータは適切ではないこともわかった。

3-2 第三回・第四回の公演

三回目と四回目は落語に紙切りを加え、同一の内容で実施した。前回の反省を踏まえ、落語の演目を吟味し、初心者向けの分かりやすい演目という意味で「寿限無」と「お菊の皿」を選択した。そして、内容の理解を助けるために、「寿限無」は演じる前に英語のあらすじを用意して参加者が読めるようにした。「お菊の皿」は英語のライブ字幕をZoomの共有画面を使ってパワーポイントのスライドとして表示した。これらの改善点は、落語に馴染みがなかったり、理解に補助が必要だったりする参加者に特に肯定的に捉えられていた。また、日本語教育関係者に向け「寿限無」を日本語学習に使用する際の教材案も提示した。教材案は同様の活動を行う上で参考になるよう『初級者からできる日本

語学習者による小噺プロジェクト』(畑佐)に掲載してある。

紙切りでは、観客から受けたリクエストを即興で切るといふ実際の紙切り芸の形を踏襲し、リクエストをチャットで受け付け、それを二楽師が切るといふ形で実施した。その結果、アメリカ、スイス、スペイン、ブラジルなど世界各地からリアルタイムでリクエストを受け付け、それを二楽師が切るところを共に鑑賞することができた(図2)。二楽師が切った作品は送料を参加者に負担してもらふ形で送付した。参加者の反応からは、紙切り芸の大切な部分はオンラインでも、しかも国境を超えて、伝えることが可能であることが窺われた。



図2 紙切りの様子

これらの試行では、技術面と運営面の課題がいくつか明らかになった。まず、演者側の接続状況が不安定だったり、機器のスペックが不十分だったりすることにより、安定した視聴環境が提供できないことがあるという点である。この点に関しては、外付けのマイクやカメラ、クロマキー幕など通常のオンラインミーティングとは異なる準備が必要となることがわかった。また、参加者側の機器やZoomに対する理解も重要な要素であるため、事前に可能な限り情報提供と注意喚起をしておくことも必要だと言える。最後に有料のイベントとする場合、参加費の額、参加者の居住国・地域によって、eventbriteなどのオンライン決済サービスやAmazonギフトカードでの支払いなどの支払い方法、支払いのタイミングを検討することも必要である。

4. 実践事例

4-1 落語の実演と紙切りの講義と鑑賞(プリンストン・イン・石川プログラム主催)

本実践はプリンストン大学の夏の集中日本語プログラムに参加する学生を対象に行われた。本プログラム(PII)は、プリンストン大学が石川県の協力を得て、毎夏開催しており、2020年は、プリンストン大学での日本語学習が2年目の学生と3年目の学生、計25名が参加した。通常、学生たちは石川県金沢市で8週間ホームステイをしながら、一日3時間の日本語の授業や午後には希望者が文化体験活動に参加する。しかし、2020年はコロナ禍でZoomを使って全てオンラインで行うことになり、学生たちは自宅(米国23名、中国2名)から参加していた。6月9日に落語、6月16日に紙切りを各60分の授業時間の枠で紹介した。Zoomホストと講師(畑佐)米国、出演者は日本から参加した。

6月9日は英語を使った落語と寄席についての簡単な講義と柳亭左龍師と畑佐の掛け合いによる落語の仕草のデモンストレーション⁽³⁾から始めた。そして、引き続き、柳亭左龍師による「転失気」鑑賞という流れで行い、最後に学生が左龍師に質問する時間を設けた。質問とディスカッションは日本語と英語の両方を使って行った。仕草のデモンストレーションはライブで行い、「転失気」は事前録画したものに字幕を付けた(図3)⁽⁴⁾。事前に準備した動画を使用することにより、生配信による問題を回避でき、且つ、より丁寧な字幕が提供できた。



図3 字幕付き動画

二回目は英語での紙切り芸についての簡単な講義で始まり、二楽師による紙切り芸を鑑賞した(図4)。学生には事前に「猫」というお題で紙を切ってくるように宿題が出されており、それぞれの猫を二楽師に見てもらった(図5)。その後で、二楽師がその場で「猫」を切った。最後に学生からの質問を受け付けた。やりとりは主に日本語で行われたが、必要に応じて英語も使われた。



図4 リクエスト：ゴジラ (PII提供)



図5 紙切りの様子 (PII提供)

本実践では、これまで対面授業で実施してきた活動と同様に、学生が落語と紙切りに興味を持ち、楽しんで活動に参加する様子が見られ、オンラインでも体験型の活動が可能になったことがわかった。また、オンラインという状況であっても、文化的要素が学べる授業設計を行うことにより、単に落語と紙切りを鑑賞するだけでなく、落語と紙切りを楽しみながら伝統芸能への理解を深めるきっかけが提供できることがわかった。

4-2 日本語教育・日本研究のための落語の実演と入門講座(国際交流基金ロンドン日本文化センター主催)

6月25日にロンドン日本文化センターが「日本語教育・日本研究のための落語の実演と入門講座」というイベントを主催した。イベントには英国を中心としたヨーロッパの日本研究者、日本語学習者、日本語教育関係者計120名ほどが参加した。当日はロンドン日本文化センターがZoomのホストになり、イギリス人スタッフが英語でイベントの進行を行なった。出演者は柳家さん喬師と柳亭左龍師であった。

はじめに、畑佐が落語と寄席に関する講義を英語で行った。次に、さん喬師と畑佐が仕草のデモンストレーションを英語を使ってライブで行なった⁽³⁾。その後、事前録画した柳亭左龍師による「つる」と柳家さん喬師による「幾代餅(図6)」を配信した⁽⁴⁾。この二席の落語は事前に録画し、英語の字幕を埋め込んだ。そして、それぞれの演目の前には演目の背景情報とあらすじを英語でPPTを用い説明した(図7)。最後に、演者に対する質疑応答の時間を設けた(図8)。使用言語は日本語と英語両方で、交流基金のイギリス人スタッフが通訳をした。

当日は、技術的な問題もなく、場面転換もスムーズで、内容的も充実したものになった。ロンドン日本文化センターが行なったアンケートの結果からも、参加者の満足度が高かったことが分かった。



図6 柳家さん喬師の「幾代餅」の様子



図7 あらすじ説明のPPT（幾代餅）



図8 質疑応答時の演者の様子

4-3 日本語学習者を対象とした紙切りワークショップ

東京医科歯科大学と秋田大学で日本語を学ぶ外国人学生18名を対象に、紙切りを味わうワークショップ（7月31日）と、紙切りという芸を最大限楽しめるようにするためのプレワークショップ（7月24日）を実施した。日本国内で学ぶ学生に加え、オンラインで日本語コースを受講中の学生がインドネシア、ガーナ、中国から参加した。日本語のレベルは初級者から上級者が混在していた。

プレワークショップは、紙切りに関する文化的、言語的背景知識の土台を作るとともに、参加者同士の雰囲気づくりを行うという目的の下、米本と濱田が実施した。活動の目標は、紙切りの特徴を大まかに掴み、紙切り芸を楽しむための視点を得ることであった。まず、ビデオやPPTを用いて紙切りに関して日本語と英語を交えて説明を行った。ほとんどの参加者が紙切りを見たことがなかったため、紙切りのビデオを見た時には、素早く、また上手に作品を切るという部分に驚いていた。次に、紙切り師が観客を楽しませるためにどのような技を使っているのかを考えるグループディスカッションを行った。ディスカッションの中で、紙切りでは単に物の形を切り出すだけではなく、お題を表現す

るための工夫が必要であるという点に気づいていた。最後に、紙切り師の技を存分に見せてもらうには、どのような作品を切ってもらえばいいか、そのリクエストを考えるグループディスカッションを行った。学生から出されたリクエストは、「二楽師匠自身」「幸せ」「貧富」「家族と別れて暮らす人たち」などで、最終的に「2020年の生活」をリクエストすることに決まった。プレワークショップの宿題として、「2020年の生活」を師匠がどのように切り出すか予想し、そのイラストを描くこと、日本語もしくは英語で二楽師に聞きたいことを書き出すこと、紙切りワークショップで使う日本語を学ぶためのビデオを見ることの3つを提示した。

ワークショップは紙切りを実際に体験することを目的とし、紙切りという芸を最大限に楽しむことを目標に実施した。教員の介入は進行と必要な通訳にとどめ、二楽師の芸を見たり、お話を聞いたりすることに焦点を当てた。まず、二楽師が実際に紙切りをするのを鑑賞した。オンラインであっても、二楽師の芸を目の当たりにできた留学生は、その技に感嘆していた。次に、学生が選んだリクエストである「2020年の生活」を二楽師が切るのを鑑賞した（図9）。切った後に、宿題で書いてきた自分たちの予想と見比べ、二楽師からもコメントをいただいた。



図9 2020年の生活

その後、実際に紙とはさみを使って、二楽師に教えてもらいながら、林家（2020）に掲載されている2つの作品（ちょうちょ、猫）を切った。初めての体験でスムーズに切れなかったり、間違えて切ってしまったったりすることもあったが、ほとんどの学生が作品を完成させることができた。それぞれの作品をカメラに映す学生の顔か

らは、作品を切れたという達成感と満足感が伝わってきた。最後に、質疑応答を行った。ワークショップの宿題として、「コロナ収束後のわたし」という題の紙切りを行い、Padlet[®]にアップロードすることが二楽師から指示された(図10)。



図10 学生の作品

本実践から、オンラインであっても、活動の目的・目標に沿った設計をすることで、参加者が楽しみながら伝統芸能の魅力に気づく機会を提供できることがわかった。今後の改善点としては、インターネット状況により、音声や映像が途中で途切れてしまったり、普段の授業でもブレイクアウトルームでの他の学生とのやり取りが苦手な学生に対し、十分に手当てができなかったりしたこと、接続が不安定な場合の対処やグループワークが苦手な参加者を想定した工夫などが挙げられる。

なお、本活動のワークショップ部分は、伝統芸能についてのオンラインでの教育活動の一案を提示することを目的に、国内外の日本語教育関係者を対象とし、ワークショップの見学を可能とした。日本、アメリカ、ドイツ、イギリス、ブラジル、フランス、ベルギー、スイス、スペイン、ルーマニア、スロベニア、インドネシア、タイ、オーストラリアの14カ国から46名の参加があった。見学者からは「師弟継承に関する話」や「二楽師匠の修行時代」に関する部分に焦点を当てた授業設計を試みたいという意見があった。また、事後に自分の所属機関でもやってみ

たいという連絡があった。同様の活動を行う上で参考となるよう、学生向けのワークショップで使用した教材や資料等は『林家二楽師匠の紙切りの技を切る』(畑佐)にて公開している。

5. まとめ

今回の一連の活動を通じて、オンラインであっても一方的でない教育活動が十分行えることを確認した。4-1と4-2の実践で主催者となったのは、3章で紹介した試行の参加者であった。彼らが短期間で具体的な活動を立案し、実践に繋げてくれたことは、我々にとって大きな励みになった。また、元々コロナ禍への対応策として始めた活動であったが、その中からコロナ収束後も十分利用できる様々な可能性が見えてきたことは意義深い。特にこれまで地理的、経済的制約などから実施に踏み切れなかった国・地域であっても、比較的容易に国・地域、時間を越えた多様な教育活動を提供できることを示すことができたと言える。

伝統芸能の鑑賞や演者の語りを基軸とした教育活動をオンラインで実施する場合の鍵を二点あげる。第一に、カメラやマイク、クロマキー幕などの機器・機材を始めとして、日頃のオンライン授業やミーティングとは異なる目的と内容に沿った環境を整える必要がある。第二に、オンラインという空間が持つ「壁」を超えるためには、演者との念入りな打ち合わせを行いながら、授業活動を形にし、展開していくことが重要である。

最後に、今回の活動に薄謝にもかかわらず協力をして下さったプロの落語家と紙切り師(柳家さん喬師、柳亭左龍師、林家二楽師、柳亭左ん坊氏、林家八楽氏)の方々に心よりお礼申し上げます。

注

- (1) ミドルベリー大学日本語学校は米国バーモント州のミドルベリー大学が運営するThe Language Schoolsの一つである。トータルイマージョン型の夏期集中講座で学習動機が非常に高い学生が全米から応募してくる。日本語以外使用禁止の校則を忠実に守りながら、生活言語も日本語に限定して8週間を過ごす。教員も学生

と同じ寮に住み、食事と一緒にする。授業時間以外には、週末も含め、クラブ活動、特別講演、運動会、映画上映、発表会など、様々な課外活動が用意される。その一つとして、2006年から2018年までプロの落語家と紙切り師を招待し、一週間滞在してもらいながら、落語と紙切りを題材とした教育実践を行った。

- (2) これら一連の活動はウェブサイト「初級者からできる日本語学習者による小唄プロジェクト」と「林家二楽師匠の紙切りの技を切る」に詳しく報告されている。
- (3) 仕草のデモンストレーションは「初級者からできる日本語学習者による小唄プロジェクト」サイトで見ることができる。
- (4) 字幕はAegisub <<http://www.aegisub.org>>という無料ソフトで作成し、ASSという形式で保存した。VLC media player <<https://www.videolan.org/vlc/>>のような汎用メディアプレーヤーはビデオファイルを再生する時にASS形式ファイルを読み込み、画面に字幕を埋め込んでいく。Aegisubは多言語に対応しているので、今回作った英語字幕ファイルを他の言語に翻訳すれば、他の言語の字幕ファイルを作ることができる。このような多言語字幕の制作は日本語学習者が行なうプロジェクトとしても、興味深いものになるだろう。
- (5) 落語のあらすじのPPTの作成には黒田絵美子教授（中央大学）の協力を得た。
- (6) Padlet <<https://padlet.com>>とは動画や写真ファイル、メッセージなどが共有できるアプリである。

参考文献

- 畑佐一味『初級者からできる日本語学習者による小唄プロジェクト』
<<http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/rakugo/rakugobystudents.html>> (2020年8月1日)
- 畑佐一味『林家二楽師匠の紙切りの技を切る』
<<http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/kamikiri>> (2020年8月1日)
- 畑佐一味・久保田佐由利 (2009) 「一人で演じる日本語会話：小唄プロジェクトの実践報告」『Proceedings of the 16th Princeton Japanese Pedagogy Forum』, 20-31, <<https://pjpf.princeton.edu/sites/pjpf/files/pdf/07-hatasa-kubota.pdf>> (2020年8月1日)
- 林家二楽 (2020) 『ビリビリ！ チョキチョコキ！ 大へんしん！ 切り紙あそび(4) 知ってる？ でんとう紙切り』ポプラ社
- 米本和弘・曾我部絢香 (2012) 「初級後半での落語を用いた授業活動の実践報告」『Journal CAJLE』13, 63-83, <<http://www.cajle.info/wp-content/uploads/2012/06/Volume-13.063-083.pdf>> (2020年8月1日)
- Hatasa, K. (2012). Integrating “Rakugo” and “Kobanashi” in Japanese Language Classes at Different Levels. *Japanese Language and Literature*, 46(1), 201-215.